まぼろしの祖国

大城立裕

まぼろしの祖国
昭和五十三年五月十日　第一刷発行

著　者　大城立裕（おおしろ　たつひろ）
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
　　電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）振替／東京八―三九三〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一八〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

▽著者略歴＝大正十四年沖縄に生まれる。
沖縄二中を卒業後、上海の東亜同文書院大学に学ぶも敗戦により中退。
現在、沖縄県史料編集所所長。第五十七回芥川賞受賞。
主な著書＝「カクテル・パーティー」「小説　琉球処分」「恩讐の日本」ほか

© Tatsuhiro Oshiro　1978　Printed in Japan

0093-128953-2253(0)　（文1）

まぼろしの祖国

目次

プロローグ　7

第一章　コザ——疾走と再生　17

第二章　東京——幻想と逆流　86

第三章　故郷——潜行と転生　159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第四章　土地——連帯と疎外　236
第五章　海原——不信と感傷　336
第六章　シマ——絶望と希望　455
エピローグ　619
後記　625

装幀　伊藤憲治

まぼろしの祖国

プロローグ

一九四五年秋、沖縄本島中部の東海岸に面した東恩納（ひがおん）という貧寒な部落が、いきなり活気にあふれた。沖縄島を占領したアメリカ軍が、まだ錆びた兵器の散在する原野にコンセットやテントを急造し、この部落で沖縄全住民にたいする戦後行政をはじめたのである。捕虜収容所から知識人たちが招集され、琉球諮詢委員会が組織された。

社会のあらゆる機能は、戦争でまったく崩壊し、緊急なやりなおしを迫られていたが、学校教科書の編集はそのひとつであった。左に掲げるものは、その編集の過程における、ある会議の記録である。

出席者は、

官吏 諮詢委員会文教部の職員。戦前、教師や文教官吏をつとめたが、この教科書編集の責任者となっている。

軍人 アメリカ軍政府の職員。少佐。もとは大学のアジア史教授で、日本語が達者である。

校長 教職歴三十年。戦後も小学校現場にいる。

教師 陸軍士官学校卒。卒業とともに敗戦。戦後、高校教師となる。

官吏 遠いところをわざわざ。車はありましたか。

校長 さいわい、軍作業の車が通りかかったので、手をあげたら、乗せてくれました。

教師 私は歩いてきました。

官吏 中城（なかぐすく）から？　五里はあるでしょう？

教師 三里ぐらいかと思いましたが。

校長 士官学校できたえたんだなあ。

軍人 それだけではないでしょう。沖縄復興の夢をかけての若さだ。

教師 そんな大それたものではありません。なんとなく歩いてしまったんです。

官吏 あなたを五時間も待って、午後になってしまった。急ぎましょう。当局でつくった「よみかた」「文学」の教科書の粗案を読んでいただいたのだが、率直な現場の意見を聞かせてください。

教師 その前にちょっと。……つまり、中城から歩きつづけてきたわけです。泡瀬（あわせ）で坂を登り、登りつめたら、小高いところでひと休みしました。そこから中城湾（ちゅうじょうわん）が一望のもとに見渡せます。私どもが幼い頃からながめてき

た海と、同じ色で、満潮なんです。ただ違うところは、あの青い海にいま軍艦やら舟艇やらが、赤錆びた残骸をさらして、白い波がそれを噛んでいる。幼いころ、中城湾には日本の連合艦隊がはいってきました。しかし、まだ平和で、私たちはそのサーチライトを美しいと思った。あれとこれと思いくらべて、歌でも詩でも作りたい感興が湧きました。これを、散文でもよい、教科書にいれられないものかと思ったのです。

官吏　わかるね。わかるけれども、テーマが重すぎる。いま書ける人はいないでしょう。

教師　そうでしょうか。戦争のとき、私は沖縄にいなかった。それでなおかつ、これだけの感動がある。戦争をじっさいに生きぬいてきた人なら、なおのこと……

校長　いや、私の場合でいえば、むしろイメージの収拾がつかないね。

軍人　戦争にかかわるようなことは、さけるようにしてほしいのです。

教師　戦争といっても、これは生きぬいてきた証(あかし)として……

官吏　それは後世の文学にまかせましょう。

校長　文学といえば、この教科書名は、「よみかた」はまずいいとして、ハイスクールの「文学」というのは、……中身は文学だけでもないと思いますが。

官吏　「国語」というよびかたを、米軍当局がきらったので。つまり、「国語」というのを英語にすれば、Japanese Language となって困る、という。

校長　沖縄はもう日本ではない、ということですか？

教師　「国語」を素朴に訳したら National Language でしょう。日本と限らず、琉球王国という歴史もあるではありませんか。

軍人　琉球王国の National Language なら琉球語でしょう？

教師　まあ、そうなりますね。

軍人　それを教えられますか。

教師　教材をつくるのが大変だが、理論的にできないことではないでしょう。

校長　きみ、おどかさないでくれよ。私どもは沖縄口(うちなーぐち)で学校教育をする方法など、習ったことがないよ。

教師　沖縄を日本から切りはなすことを大前提にするなら、それくらいの覚悟があってもよいとは思いません か。

校長　理屈としては分かるがねえ。しかし、歴史はここまで来てしまったのだし、いまさら明治以前まで戻せはしないよ。

官吏　それは、米軍がとても興味をもっている問題らしい。じつは、戦後いちはやくGHQで、東京に住んでいらっしゃる仲原善忠先生に意向をきいてみた。琉球語で戦後沖縄の教育をたてなおせないかと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

教師　答えはノーでしょう。
校長　分かってるなら、言うことないじゃないか。
教師　ただ、私はくやしいんです。いや、その前に感激したことを語らなくてはならない。戦後、標準語をしゃべらなくてもよいということになったとき、涙が出るほどうれしかった。沖縄人が解放されたと感じた。
校長　職業軍人をめざしていたところへ敗戦で、絶望したのではないのか。
教師　それとこれとは別です。絶望と解放感が両立するのです。だから、戦後の再生の意味は、沖縄において最も強烈に意識されてよいと思います。
軍人　あなたはそれでは、琉球語で教育ができると思うのですね。たとえば「琉球国語」と名づけて。
教師　いや、実際にやるとなれば、事は単純ではありません。
校長　どうも話が紛糾してきたな。時間もないのだ。勇み足を節約しようよ。
教師　火をつけたのは、あなたですよ。
官吏　もめては困るね。(笑)当局としては、教科書の名称は、いろいろあるにはあるが、まあよいではないか、ということになった。
教師　案外、あいまいであっさりしているんですね。
校長　戦争に負けたんだもの。
教師　戦争に負けても、論理は論理です。むしろ、そういうあいまい主義が日本を敗戦に導いた。
軍人　あなたの論理でいえば、あなたは教職につけませんよ。
教師　士官学校を出たからですか。話がずるくなってきたなあ。(笑)
官吏　陸士、海兵の出身者にいちいち戦争責任を問うていたら、沖縄は人材払底で復興できはしない。だから問わないことになった。しかし、それは最大限の譲歩であって、すくなくとも教育においては、日本精神と軍国主義と超国家主義とは沖縄でまっさきに追放しなければならない、というのが米軍当局からまっさきに指示してきた編集方針だ。
校長　平和国家琉球の建設ということですな。
軍人　国家ではありません。
教師　地域ですか。なんだか落ちつかないな。平和地域琉球か。地球のどこかに、そういうユートピアがあったような気持ちになってきた。ユートピアなだけに、現実感覚として慣れません。
軍人　それは、あなたがたが、日本国民として飼いならされてきたからです。
教師　解放されたように見えて、まだ意識までは十分に解放されていないということですか。
官吏　米軍の人はよく私たちに言うのだ。なぜあなたがたは、日本人でもないのに、日本人的な発想をするのか

……

校長　いったい、私たち沖縄の人間は、どの程度に日本人であり、どの程度に日本人でないのですか。

軍人　あなたがその疑問を戦後はやくも持ちはじめたということは、やはり本来日本人ではないという証拠ではないでしょうか。

官吏　とにかく、米軍は根本的にそう考えている。その本来の沖縄に積極的に戻そうとしている。

教師　それはやっぱり占領政策でしょう。

軍人　（笑って）あなたは、やっぱり軍人ですね。軍隊のことはよく分かる。

教師　冷やかしては困りますなあ。

軍人　正直にいうと占領政策でもありましょう。しかし、そのほうが沖縄のためでもあると、米軍は考えています。

教師　なぜですか。

軍人　はやい話が、琉球王国時代は、小さいながらも、日本国とは関係なく世界に直接つながる存在として、開放されていたではありませんか。

教師　このなかにある、四年生用の「マラッカへの船」とか、八年生用の「沖縄船とポルトガル船」という文章は、そういう意味でとりいれたものですか。

官吏　ようやく本題にはいれそうだな。その教材をどう思う？

教師　ここに書かれた事実に誤りがなければ立派な教材です。

官吏　妙な言いかたをするね。十四、五世紀において琉球王国の交易船が東南アジアで活躍していた、しかも平和的活躍で喜ばれていた、という歴史事実に誤りがあると言った人はいないよ。

教師　いや。テーマとしては立派です。南方発展が、この数年間のように戦争のためではなく、中世において平和交流の活動として行われたというのは。

校長　敗戦の自信喪失から精神作興をするためには、この教材はよいと思いますね。

教師　私が考えていたのは、ごくつまらぬ、技術上の問題なんです。よくもこう、年代や人名、地名を間違えずに書けたなと。間違いないんでしょうな。いやしくも教科書ですから。

官吏　いやしくも教科書だから慎重に考えるよ、きみ。資料はあったのだ。壕のなかやら、いろんなところから、いくらか出てきた。

校長　じつは、感心しました。古い教材を見ては、古い教科書がよくあったものだと思い、新しい教材を見ては、よくもこれだけ新しく文章を書きおろせたものだと。

官吏　じつは、われながら感心しているのだ。来ていただいたのは、その自慢をしてみたいということもある。（笑）

教師　五年生用の「ベンゲット道路」というのも、いいで

す。

校長　なつかしかったなあ。フィリピンのベンゲット道路というのは、沖縄出身の移民がいなければ造れなかった、という話は子供の頃から聞かされていた。明治三十年代に、フィリピン人もシナ人も途中で挫折した難工事を……読んでみましょうね。

……彼等はしんぼう強く働きました。けれどもこの仕事はなまやさしいものではありませんでした。豪雨のため、岩はくずれたり土砂は流されたり、食物には慣れない上に熱病になやまされて、相当の死傷者を出しました。しかしそれぐらいでひるむような人々ではありませんでした。やがてこれらの障害に打勝ち、バギオに通ずるベンゲット道路は見事に沖縄人の力で出来あがりました。今バギオ市の入口の松林にこの難工事にたおれた沖縄の人々の墓碑が永久にバギオ市を護るかのように立っています。

沖縄の人間が国際的に貢献したという例にもなりますよね。

教師　いや、ちょっと待ってくださいよ。そうなると、私はさっきのほめ言葉を取り消さなければならないのかな。

官吏　批判があるかね？

教師　どうも、ひっかかるのです。貢献というが、やはり搾取されたのではないかと。ていよく低賃金で使われ、疫病死、墜落死などの犠牲を払って、そのあげく墓碑銘ぐらいの名誉のしるしだけで……

校長　だから、こうして後世の教科書にもあらわそうとするわけさ。

教師　ベンゲット道路というのは、要するにアメリカ人の避暑地への道路でしょう。そのための犠牲になったということは、要するに大東亜戦争という日本帝国の植民地獲得戦争のために沖縄が犠牲になったのと、同じではありませんか。

官吏　きみ！

軍人　あなたの疑問は、行きすぎだと思いますがねえ。日本の侵略戦争は破壊だけであった。ベンゲット道路工事は、すくなくとも道路をつくった。

校長　するとたとえば、こういうこともきみは考えているのかね？　八年生用に「首里城跡の赤木」というものがある。きみがさっき言った生きぬいた証というものが書かれていると思うのだが、それはともかくとして、首里城下のハンタン山のそばの園比屋武御嶽の石門が竹富島の西塘という石工によって造られたということを、ちょっとだけ書いてある。西塘は尚真王が竹富からつれてきた奴隷であるから、その犠牲による建造物の価値は評価したくないというのかね？

教師　それはすこし違います。園比屋武御嶽の石門は、りっぱな芸術作品です。戦争でこわされていなかったら、

米軍でも十分に認めたでしょう。

軍人　いや、こわれても記録では十分に知っています。首里城正殿も歓会門も円覚寺も。だから、この「首里城跡の赤木」という文章は、戦争を思いださせるような文章でありながら、そうした琉球の価値の再創造を期待して、認めることにしたのです。

官吏　それともきみ、芸術作品と道路とでは、意味が違うというのかね？

教師　それだけでもありません。

軍人　あなたの考えは、共産主義の考えに近いですね。

校長　用心してくれよ。（笑）誤解されては、ひきあわない。

教師　つまり、私の言いたいのは、こういうことなんです。沖縄人の能力、エネルギーを発見して自信をつけようということには賛成です。「マラッカへの船」「沖縄船とポルトガル船」などは、それに合致すると思うのです。しかし、「ベンゲット道路」となると、なにか被圧迫民族としての沖縄人を、やはり思いだしてしまう。我慢しすぎて身につけたエネルギー……

官吏　（笑）我慢しすぎたエネルギーはよかった。しかし、「ベンゲット道路」についてはね、こういう考えもあったのですよ。つまり移植民の意義というものの再認識、再検討をしようではないかという……。十六世紀ヨーロッパの植民活動は完全に搾取そのものであった。それで二十世紀になってからの日本人移民は、搾取されたという苦労もあったが、一方で、成功した者は現地経済の発達に貢献するということもあった……

校長　明暗いずれにせよ、日本と外国との理解、交流はあったということですね。

官吏　血みどろの生命力をもって、国際理解を購ったということがありはしないだろうか。

教師　戦争も文化交流の契機でした……（笑）

校長　どこまできみは……。やれやれだ。

官吏　いや、その通りだ、結果論としてはね。しかし、いま私たちは動機論をもってきたい。戦争の動機を、やはり文化交流できみたちは肯定するかね？

教師　そんなことはありません。

校長　沖縄のこれだけの破壊に、文化的意義なるものはないはずです。

教師　ただ、封建的なものが、あるいは破壊されたかも知れません。

官吏　まず、それはあとの話にしよう。国際交流の場において血みどろのたたかいがあったとしても、その動機がやはり無私の貢献であったとしたら……

教師　わかりました。ベンゲット道路工事において、それがあったことは、十分に認めます。じつは、私がさきにこれをよいと言ったのは、そのことを素朴に感じとったからなのだと思います……

官吏　考えてみれば十四、五世紀において琉球は、東南アジアで文化交流の貢献をはたした。それが近世以降は何のなすところもなく、ひたすら自分の地位を守るに汲々とした。ベンゲット道路の工事にはせ参じた人たちのなかには、沖縄人の力をみせてやろう、世界のために貢献するエネルギーを、と意気ごんだ人も多かったのではなかろうか。

校長　ただ……しいて口をさしはさむのではありませんけれどもねえ。そのお話で思いだしたのですが、沖縄戦で死んで行った若者たちの多くは、この働きで沖縄人が一人前の日本人として認められるようにと願望した、ということもあるんですよねえ。

教師　すると、貢献や犠牲の意識にも、問題はあるということですか。

官吏　その通りだ。その問題がないとはいえまい。しかし、このさいその評価は後世にゆだねることにして、いちおう国際的文化交流の可能性ということで理解しては？

校長　「舟楫ヲ以テ万国ノ津梁トナシ」ですか。

官吏　それだ。その言葉を、われわれもはじめから念頭においていた。一四五八年に尚泰久王が首里王城に梵鐘をかかげたときの鐘銘だが、それが十四、五世紀のころの琉球国の理想であったわけです。いまそれを、新生沖縄の理想にしようというわけだ。これについては？

校長　全然、批判の余地はありませんでしょう。

教師　ただ、また叱られそうですけれども……八年生用の「白い煙と黒い煙」を読んでいると、近代沖縄における船の旅立ちとは、どうしてこんなに悲しいものになったのだろうと思いますねえ。

校長　なるほど、そういう話になったかねえ。私はこの教材を素朴に、沖縄の庶民生活の心やさしさという風に受けとったのだがねえ。

教師　ええ、それはたしかにあります。だから、この教材に反対するわけではないのですよ。出稼ぎに行く娘を、——その沖をゆく船の黒い煙を老夫婦が焚火の白い煙で見送るという風景は、やはり沖縄の美しい心には違いないのですから。ただやはり、近代の美しさとは、規模が小さくなったなあ、と思うのです。

官吏　それを、いずれおおらかな文化をうたいあげる歴史にしたいものだというのが、われわれの趣旨ではあるわけだ。

校長　歴史は、よその力でつくられてしまったものは仕方がないから、やはり今後は自分でつくることを考えなければならないということですねえ。

官吏　三年生用の「蔡温」だとか、七年生用の「産業の恩人」だとかいう教材は、そのつもりなんですよ。

校長　私も、そういうつもりで読みました。十七、八世紀の薩摩支配時代のこの偉人たちの業績というものは、圧

制にたいする愚痴や反発というよりは、沖縄が生きぬくための知恵であったわけですねえ。

官吏 こんどの戦争で、戦場をにげのびながら甘藷の恩恵をずいぶん蒙りましたからねえ。(笑)

校長 甘藷を青木昆陽に伝えたのも琉球経由だ、ということもありますよねえ。

官吏 それもある。それに、この荒廃した沖縄をいかに立ち直らせるかということにも、参考になると思うがねえ。

教師 どうも自己満足になりそうですなあ。惜しむらくは、歴史上の誇りだけになってしまった。未来展望が書かれませんかねえ。

官吏 未来展望というと?

教師 現時点におけるダイナミズム……たとえば、ジープが走っているのを見たりすると、私はそれを感じるんですがねえ。

校長 あれはアメリカのダイナミズムだよ、きみ。見ようによっては、あれは失望落胆の響きにきこえるらしい。

教師 そうですかなあ。

校長 たとえば、島袋全発先生が最近よまれた歌だというが、

あたらしきブルドーザーの音なりき、わが生のみはただに古りゆき

教師 なるほど、年ですなあ。(笑)

校長 年のことだけではないよ、きみ。文化のエネルギーの嘆きに、これがならないとは限らない。そう思わないかね。

教師 だから、未来展望のヴィジョンが必要だということを、言ったつもりですが。

校長 未来展望といっても、表面的なダイナミズムだけではそれはつくれないと、私は言いたいのだよ。

教師 内面的なダイナミズムということが、たとえば「首里城跡の赤木」のようなセンチメンタリズムでなしに、出せますか。

校長 私は、よく思いだすのですがねえ。古知屋の収容所にいたころ、組踊が上演されたではありませんか。

官吏 あったね、「森川の子」……

校長 ドラム罐をならべて、そこに板をおき、舞台をつくっていました。米軍から落下傘の布やら、赤い布をもらってきて衣裳をつくり、白い粉の胃腸薬をもらって化粧料にし、焚火のスミでマユをひき……

官吏 パラシュートの布を空罐にはって、電線をくっつけて三味線をつくったね。それで地謡をした。

校長 あれが、文化再生のエネルギーといえないだろうかと、思うのです。収容所のテントからあの三味線の音がきこえたとき、生きる喜びというものをとりもどしましたもの。若い人は、感傷的と笑うかも知れないが。

教師 いえ、分かります。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.